

---

**どうやらいじめられっ子の魔王が俺と世界征服したいそうです**

水面

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

どうやらいじめられっ子の魔王が俺と世界征服したいそうです

### 【Nコード】

N1697Y

### 【作者名】

水面

### 【あらすじ】

遙か昔、人間と魔物が共存している世界がありました。しかし、時代の移り変わりと共に人間は魔物を遠ざけて、やがては退治するようになっていきます。この極東の地も例外ではありませんでした。魔物たちは人間たちとの別れを惜しみつつ魔界へと帰っていきました。東の地の魔王を魔界へと送り返した勇者の末裔である東條信弥は、何も知らないまま魔王を現代へ呼び寄せてしまいました。でもどうやらこの魔王様、他の魔王にいじめられてずいぶんと内気な性格になってしまったようです。魔界へ帰る際に大変お世話にな

った勇者に対して、全幅の信頼を置いていた彼女は信弥にべつたり。そんな彼女の目標は世界征服！ 他の魔王を見返すにはそれしかないようです。でも信弥の妹の美弥に丸め込まれてボランティア部に入ることに。世界の征服も人助けから。

はたして咲耶は他の魔王を見返すことが出来るのでしょうか。

という設定で見切り発車

コメントなどいただけると幸いです

## プロローグ(前書き)

魔王が封印されているらしい

## プロローグ

学校の怪談。全国の学校にある誰が考えたのか、どこも同じよう  
なしっぱい話がいくつかある不思議なアレだ。無論この俺 東條  
信弥が通っている学園にも代々脈々と続く怪談がある。

トイレにいらっしやるあの方、自走する模型や、目を光らせたり  
勝手にピアノを演奏する音楽室の偉人達なんかが有名かもしれない。  
トイレは洋式で模型も肖像画もないこの学園には、ある一風変わった話があった。

学園の裏手に生えてる大桜。4〜5人の手を繋いでようやく囲める樹幹。三階の校舎を優に超える高さでを持ち、毎年春には花びらを涼風に乗せて空と地上を桃色に彩る。休み時間には、生徒がベンチや草地に陣取りお弁当などを広げ憩いの場になる。その中心に堂々とそびえ立つあの大桜には……………、どういう訳だか魔王が封印されているらしい。

確かに何かか憑いててもおかしくないほどの立派な大木だと思いが、学校の会談くらいで魔王様がしゃしゃり出て……………もとい、いらっしやるなんて安売りはやめたほうがいいと思う。

この大桜の満開を見るのは今年で二度目になるが幸いにも魔王が現れたなんて話は聞かないし、この世界は今日も平和だった。

## 出会い（前書き）

美弥が垣間見たものとはなんだったのだろうか

## 出会い

午前中の春の式典が終わった昼過ぎ、俺は件の桜の元へ来ていた。今日は午前授業だけなのでさすがに人がいない。俺は大きく広がった見事な枝の下にある、桜を見上げられるベンチへと腰掛けて目の前に散ってくる桜を数える。

咲き乱れる桜を見に来るような雅な趣味でも、見ず知らずの女の子からの手紙で呼び出されるほどもてる男でもない俺だが、視界の向こうからこちらに駆けてくる女の子が一人。

本日めでたくこの東武学園に入学した、妹である東條美弥だ。俺なんかにはもつたいたないくらいよく出来た妹の中の妹である。

俺はベンチから立ち上がり、美弥を出迎えた。そばまで駆け寄ってきた美弥は、まるで全力疾走した後のように膝に手をつけて長く艶やかなツインテールを上下に揺らしながら息を整える。

肩に舞散る桜と同じびんく色に頬を上気させて美弥は

「に、兄さん……、遅れて……、ごめんなさい」

「そんなに急がなくてもよかったのに」

俺は肩についた花びらを指先でつまんで払いながら答えた。美弥は顔を赤らめて照れくさそうにしている。

「せっかく兄さんが学校を案内してくれるんだもん。でも、ここに来るときに少し迷っちゃって」

「やっぱり昇降口あたりで待ち合わせたほうがよかつたんじゃないか」

「ううん、いいの。こういうのもなんかデートみたいでときどきしちゃった。それで、これが桜の大樹ね。すっごく素敵」

美弥は桜の木を見上げた。咲き乱れる桜の花と青い空のコントラストがまぶしい。春風に舞い踊る桜花が俺達を違う世界へ誘っているかのようだった。

「くしゅん」

かわいいくしゃみが聞こえた。初春の風はまだ冷たく、走って汗をかいた美弥の体温を奪っていったのだろう。

「美弥、大丈夫？」

「うん、平気だよ。みや久しぶりに頭なでなでしたほしいな。ねえいいでしょ？」

美弥はたまにこうして兄に甘えてきたりする。よく出来た妹である。こんな風におねだりされて断れる兄は居ないだろう。居るとするならば、そいつには兄の兄たる資格などない。

今は俺達以外誰もいないが、普段は人であふれている場所で妹の頭をなでるといっつのは若干恥ずかしかったりもするが、これも兄としての勤めである。はにかみながらも頭に手を伸ばした。

「よしよし、なでなで」

美弥は目を気持ちよさそうに細めて、ふみやくと猫みたいな声を漏らしながらなでられるがまだ。

「ご満悦の美弥だったが、急に顔が引きつったかと思うと薄紅色だった顔がだんだんと青く変わっていき、目を丸く見開いて、我が妹らしからぬ驚愕の表情でわなわなと震えだした。

「美弥、どうした？ 大丈夫か！」

ああ…と、かすかな唸り声を残して卒倒した美弥をあわてて抱きかかえる。

「美弥、美弥！」

「に、兄さん……」

美弥は震える腕を桜の木の方へ向けたかと思うと力なくうなだれてしまった。俺は恐る恐る慎重に美弥の示すほうへ振り向く。

最初に目に飛び込んだのは吹き抜ける風に舞う銀の帯、小さな少女の長く流れるよう銀髪が、春の陽光を浴びてキラキラと輝いている。風雅でいて派手すぎない装飾を施した白衣と胸元に見える朱い掛襟、同じ朱色の足元まで覆う緋袴。そこからちよこんととびでた草履を履いた足袋。

これは巫女服だな。しかもただの巫女服じゃない。素人目から見



ても、コスプレや神社で見るバイトの巫女さんの着ているものなんかよりも、ずいぶんと高級品であろう。

だがせっかくの巫女服もなんだかよく見ると、あちこちすすけたり、はほつれている。なによりこれを着ている銀髪少女が頭を抱えて丸くなり、小柄な体をプルプルと震えさせていて、その様子がまるで雛鳥を連想させる。なんだかすごく残念な感じだが、そんな様子がどことなく愛らしく思えてくるから不思議だ。

こうしていても埒が明かないので、思い切って話しかけてみた。

「あの……」

ぴくりと体を震わせて反応した少女は片方の瞳だけをおっかなびっくり腕の間から上目遣いに覗き込む。可愛い。なんだか守ってあげたくなる。萌えとは保護欲と支配欲との葛藤だと聞いたことがある。今感じているこの感情が正に萌えというものなのか。

そんな彼女と目が合ってしまった。ヒツと小さく短い悲鳴をあげて顔を伏せてしまう。そして、またゆっくりとこちらを見上げても目が合ったとたん下を向いて小さくなってしまふ。可愛い。

そんなことを何度か繰り返して、不意に彼女が俺のことを見つめ返してきた。大きくて純真無垢な瞳をこちらに向ける少女。

「……………そ、そなたらは、その……………、東の者であろう」

搾り出すように出した声は風にかき消されそうで、聞き取るのがやっとだ。だが澄んだその声はよく通る様な気がする。

「俺は東條信弥、こっちは妹の美弥」

ぬるりと立ち上がった小さな少女はとととと近寄って腰まわりに抱きついて もとい、しがみついて顔をぐいぐいと埋めて。

「やっぱり、あずまの者じゃな。あいたかったぞ。よくぞわれをたすけてくれた。」

震えていた割には、なかなかえらそうな言葉遣いだった。両手で服をつかんでぐいぐいじゃれてきて離そうとしない。近くで見るとやはり小さい子だ。140?くらいだろうか。すすけた感じのする簪かんざしもよく見ると精巧な造りで、さらさらな銀髪から薫る甘いお香の

が鼻をくすぐる。

揺さぶられているうちに美弥が意識を取り戻した。

「……に、兄さん私ね、宇宙を見たの……。三次元宇宙を内包する四次元世界が干渉して生まれた時空の裏側を。私は確かに」

「もついいんだ美弥。世の中には忘れてもいいことくらいあるさ。それにこの物語はそういう方向じゃないんだ。」

錯乱気味の妹を優しく諭す。

「よく解らないけど、兄さんが言うならそうなのかな……」

よく出来た妹は物分りも大変よろしい。そんな妹はおぼつかない足取りで立ち上がる。まだ制服をぐいぐいとやっつてる少女の目線に合わせるように中腰になり、優しく語り掛ける。

「こんにちは、私は東條美弥って言うの、よろしくね。あなたのお名前はなんていうのかな？」

「あずまの妹じゃな、よろしい、。わらわは彼の昔この地を収めし魔王が一人、天白羽神玖珂院咲耶之姫あめのしらほのかみくがいにさくやのひめじゃ。咲耶とよんでよいぞ」

ピンポンパンポーン

(生徒の呼び出しをします。二年四組、東條信弥ならびに東條美弥。至急職員室まで来るように。繰り返しします。二年)

## 出合い（後書き）

後で触れる予定ですが

天白羽神 神名

玖珂院 官位

咲耶之姫 名前

神様としての名前と、当時の権力者からもらった役職と、個人名と  
いった感じです

魔王（前書き）

真理子先生お手製のパンフですよ

## 魔王

遙か昔、人間と魔物は世界中で共存していました。魔物とは、広くは大型の肉食獣から蛇や鳥まで多種多様な種族を含む力を持つ者の象徴。

神、天使、悪魔、幻獣、妖精、ある地方ではドラゴン、ヴァンパイア、妖怪。

その中でも、人にはなしえない御業を起こすことの出来た存在で、特に強い魔物たちを人々は　魔王と呼んだ。

彼らは互いの領分を侵すことなく互いに助け合うよき隣人であった。しかし、違う種族の共存は簡単ではありませんでした。人間と魔物の仲にもよからぬ者が出てきて、小さな争いが絶えなくなっていくます。そして、時代の移り変わり共に人間は魔物のもつ絶対的な力を次第に恐れるようになります。

ついに人間たちは魔物たちの討伐を決めました。各地で力ある人間　勇者の指導の下で魔物を常世へと送り返します。この極東の地も例外ではありません。人間たちに住処を追われた魔物たちは自ら魔界へと帰ることを選びます。

この島国の地では、特に力の強い魔物四体が東と西と南と北に分かれてそれぞれ暮らしていたといえます。彼らも常世とかえって行きました。

ただ東の魔王だけは、最後まで残り続けました。この魔王は力が強く常世へと戻ることができなかったのです。ときの勇者　東比あづま之守びのかみは、魔王の力の源たる肉体ではなく、魔王の精神を封じることによって強大な力を押さえ込み、常世へと還すことに成功したのでした。

東武学園監修　やさしい魔王の歴史その一

俺は呼び出された学年副主任である

秦宮真理子先生はたみやまりこから受け

取ったパンフレットを読み終える。どかりと座り込んでいる先生はすらりと長い足を組み替えてめんどくさそうに言った。

「読み終えたかい。……そういうわけで、その子は魔王なんだ。よろしくしてやってくれ」

「よろしくと言われても……。魔王が復活って世界規模でなんとなくやばい感じがしませんか？」

「そういう魔王も居るかもしれないが、その子はまあ大丈夫だろう。それに弱い魔物。君たちが思うところの悪魔だとか妖怪だとかは現世に結構居るんだよ。一般には知られてないかもしれないがね」

秦宮先生が天のなんとか 咲耶と名乗った少女に視線を移すと、彼女は俺の後ろに隠れてしまっただけで離れようとしな。確かにこんな子が魔王と言われても説得力に欠ける。

「魔王クラスの魔物だって結構現世に来てたりするよ。今は西の魔王のいなりのかみ稻荷神が遊びに来てるんじゃないかな。もともと共存して居たんだから早々めつたなことは起こらないよ」

西の魔王の名前を聞いたとたん咲耶が震え上がった気もしたが、とりあえず世界が滅亡するとかはないらしい。

「神様でも魔王と呼ばれる理由は解りましたが勇者ってなんか変な感じがするんですけど」

「そこにも書いてある通り、魔物や魔王、勇者ってのは世界中にいるんだ。グローバル化の波に乗って国際規格を決めて日本語訳にすると勇者だったんだ。あきらめろ」

「はあ……………」

「それで、ここからが本題なのだが。天白羽神あめのしらのかみ玖珂院咲耶之姫様様はそのパンフにも書いてある通りちょっとばかり特殊だね。魔王なのに幼く感じるのは封印のせいだろう。その封印をあんたが説きちやっただろうね」

「でも俺、封印なんて言われてなにがなんだかさっぱりで……………」

「それはその天白羽様に聞いてみるのがいいんじゃないのかな」  
おれは俺の周りをうるちよろしてる咲耶を捕まえて聞いてみた。

「わらわの封じた呪詛を解くには三つの要素が必要じゃ。一つは東の血族であること。一つは慈愛の心。一つは相手を思いやるものと、頭をなでるときの言霊じゃ。わらわが現世に再び来るときには、味方になってくる者が必ず居るようにと東がはからってくれたのじゃ」  
確かに、慈愛の心を持つて『大丈夫？』と声をかけ、美弥の頭をなでた気がする……。

「なんだか素敵な話ね」

いままで話の流れを見守っていた美弥が答えた。

「なるほどね。この東武学園は本来、天白羽神様を見守るためにできたものなんだよ。私はそのための管理人みたいなもん。当時としては追い出す形になってしまったけど……。さっきも言ったけど現世と常世の交流は続いているの。封印の解き方がわからないものだから、天白羽神様を現世にお呼びすることが出来なかつたけど。それにしても、天白羽神様は結構上位で取り扱い注意な魔王様なんだけど、どうしてこんなに内気な魔王様なのかしら？」

秦宮先生がこの可愛い魔王を見やると、彼女は俺のほうを向いて言う。

「常世でみんなわらわに意地悪するのじゃ。いやだつていつてるのに離してくれないし、おまけにあちこつちさわつてくるし、むりやりご飯たべさせられたり、なにかにつけてわらわをいじくり倒すのじゃ。もういやなのじゃ……。わ、わらわにも人権というものがあるのだ。それに」

「言っているうちに咲耶はだんだんと目に涙を浮かべていった。なんだかこれだけ聞くとちよつと卑猥に聞こえてしまうな。だが、この小動物みたいに必死で腕をぶんぶん振り回して力説する魔王を可愛がる気持ちもわかる気がする。」

思いのたけをぶつけ終えた咲耶はまたすごすごと俺の背中に隠れてしまう。そして秦宮先生は咲耶の話をもとめた。

「どうやらこの魔王様は、いじめられて内気な性格になってしまったらしい」

「……………」  
あゝ、言ってしまった。俺と美弥が気づいても言わなかった一言を、本人に向かってド直球で言ってしまった。

しれっとした顔でいる秦宮先生。咲耶も俺の服の袖を掴んで動かない。俺と美弥はその場に凍り付いていた。

……………この沈黙を破つたのは以外にも咲耶だった。

「……………せいふく。せ、世界征服じゃ。あやつらを見返すには……………、この地をわらわのものにするしかないのだ！ 信弥もわらわの右腕となり存分にその腕振るうとよかろう。期待しておるぞ。な、良いじやろ？」

取り扱い注意の魔王に世界制服を宣言させてしまった上に、その片棒まで担がされるお願いをされてしまうとは……………。だが、この子が俺の背中に隠れているうちは世界は平和なままだろう。

「それと東條、一番大事なことを言い忘れてたよ。咲耶様は今日から貴方たちの家で暮らすことになるから。それと、転校生ということとで明日から信弥と同じクラスで授業を受けてもらうことになると思う。制服や教科書はこちらで用意するから心配要らないよ。」

「え？」

「さつきも言つたようにこの学校はもともと天白羽神様をお世話するためにあるようなもんなんだよ。咲耶様も信弥君に懐いているみたいだし、現世になれてもうにはちょうどいいじゃないか。……………なんだい、親御さんから魔王について本当に何も聞かされてないみたいだね」



勇者（前書き）

「いい、咲耶ちゃん。もう桜の木の前でやった様に宇宙の法則を捻じ曲げるようなことはしてはいけませんよ」「ええ〜〜〜」「ええ〜〜〜じゃありません。それに咲耶ちゃんは女の子なんだから。あんまりはしたくないことをしていると兄さんに嫌われてしまいますよ」「う〜〜ん、……わかった」「咲耶ちゃんはいいい子ですね」

## 勇者

俺たちは咲耶を連れて家に帰った。帰る途中、二人は俺から離れて女同士の秘密の話をしていたらしい。美弥に聞いても顔を赤らめて兄さんは不潔ですなんて言われたり、咲耶に聞いても口止めされていたらしく話してくれない。なんだか仲間はずれな気分だ。

帰ると親父がすでに家に居た。俺たちはリビングのテーブルに並んで座った。美弥がみんなの分の冷たい麦茶を用意してくれた。咲耶は冷たい飲み物に興味津々だった。

「あなたが天白羽神玖珂院咲耶之姫あめのしらほのかみくがいんさくやのひめですね。お初にお目にかかります」

「うむ、くるしゅうない。信弥のお父君であるな。我のことは、咲耶と呼ぶがいいぞ」

やうやうしく挨拶を済ませる二人。

「おい親父、こんな時間に家に居て仕事はいいのかよ」

「うん、仕事はやめてきた」

「はあ？」

「まあー聞きなさい。私もお前のおじいちゃんから、勇者だの魔物だのとは聞いていたが、そんなものとは縁もゆかりもない世界で世間の荒波に揉まれ、会社の社畜となり今まで一生懸命働いてきたわけだ。だが今日お前が咲耶さまの封印を解いたので、魔物を管理する団体から咲耶様のお世話をする代わりに多額のお金をもらってな」

「いくらもらったんだよ」

ニヤニヤと汚い笑みを浮かべた親父はもったいぶって答えた。

「ん〜、信弥にはお金の話はまだ早いかな〜？ まあ贅沢しても遊んで暮らせるくらいだ。そういうわけで、私と母さんは世界一周旅行に出かけてくる。」

「はあ？」

「ほら、かあさんには今まで苦勞をかけたし、咲耶様もここに住む

ことになるんだ。五人だとこの家も十分とはいえないじゃないか。じゃいつそのことしばらく二人で母さんの夢だった世界一周旅行にでも行こうかなって。ほら、今って円高だし」

なんとということだ。おれが咲耶と出会って半日もたたないうちに世界はずいぶんめまぐるしく動いてしまった。

「生活費なんかは毎月ちゃんと振り込んで、毎週ポストカードも送るからそんなに寂しがるな。というわけでそろそろ飛行機の時間が近づいてきてるし、あんまり母さんを待たせると悪いから。戸締りと火の元の確認はしっかりするんだよ。美弥、信弥と咲耶様のこと、よろしくたのんだよ」

「はい、お父さん。気をつけて行って来てくださいね」

じゃ！ と一言残して旅立ってしまった親父。よく出来た妹は何事にも動じない。状況を良く飲み込めてない咲耶は、麦茶の氷を口に入れ、目をギュツと閉じて身を縮こまらせてらせて冷たさに耐えている。

まだ途中

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1697y/>

---

どうやらいじめられっ子の魔王が俺と世界征服したいそうです

2011年11月3日03時07分発行